

病と故郷歌い上げた

盲目の詩人、桜井哲夫さん(81)が、写真詩集「津軽の声が聞こえる」の英訳版「THE CALL OF TSUGARU」を出版した。故郷の青森・津軽の情景と、ハンセン病を患った我が身とを歌い上げた。「世界中の人々に、病のこと、津軽のことを伝えたい」という願いがこめられた1冊だ。

青森出身・桜井さん



写真詩集の英訳版を出版した桜井哲夫さん(中央)。詩の指導をしてきた斎田朋雄さん(左)と、支援者の元看護師、赤尾拓子さん(右)県庁で

「世界に伝えたい」詩集の英語訳出版

桜井さんは太正の終わり、青森県鶴田町のリンゴ農家に生まれた。ハンセン病の発病がわかり、17歳で草津町の栗生葉泉園に入園。以来、ずっとこの地で暮らす。園で知り合った高崎市出身の妻と結婚し、子どもも授かったが、墮胎させられ、その妻も白血病で若くして亡くなった。

詩作を始めたのは、もう60歳近くになってから。入園した時分に短歌をたしなんだが、29歳で失明してからは中断。同園に

詩画会が出来て、再び詩作に挑んだ。

看護婦さあーん

入れ歯が逃げたよ

枯葉と一緒に入れ歯が逃げた (中略)

たまには入れ歯よ

お前の好きな物だけ食べるがいい

入れ歯よ

夕食の時間までには帰って来いよ

(「入れ歯が逃げた」)

桜井さんを指導する

「西毛文学」主宰の詩人、斎田朋雄さん(91)は

「人間性が濃厚で、エネルギッシュだ。そして非常に分かりやすい」と作風を表現する。

頭の中で「書きためた

詩を、代筆者の手を借り

精神的に作品に仕上げ

る。88年の「津軽の子守

唄」を皮切りに、次々と詩

集を出した。勉強熱心さ

は突出していて、詩作を

初めて間もなくクリスマス

ヤンになったのも聖書や

賛美歌を身近なものにし

「口語体の詩の韻を知り

たいという不純な動機な

んです」と、ちやめっ気

たっぷり。

齢を重ね、幼少を過ご

した津軽への想いは、幾

度も帰郷を経て一層強

まる。桜井さんに共鳴し

た写真家・鏑山英次さん

が撮影した故郷の風景に

添え、昨年出版した詩集

の英訳には、同じ出版元

のウインズ出版社が協力

した。1200円。1千

部を刷った。「ローマ法

王に渡したいんです」。

恩返しも込めてか、桜井

さんは語る。